

来るべきコスモスを担うもの —風土学の射程と環境、企業、大学—

犬塚潤一郎

生活文化学科

Cosmo-ontological structure of Mediance and Education in Post-industrial society

Jun-ichiro INUTSUKA

Faculty of Human Life Sciences

The theory of mediance, developed by Augustin Berque through synthesis of the ontology and the geography, inspired by the idea of *Fudosei* of Japanese philosopher and phenomenologist Tetsuro Watsuji, has a range to reorganize our relation to the environment, as called reconstituting the cosmos of human.

In this essay, I will try to retranscribe his theory to solve the subject of modern society, especially focusing on the role of the university for solving the subject of business organizations and showing the draft of an educational program.

Key words : médiance 風土性, Augustin Berque オギュスタン・ベルク, Tetsuro Watsuji 和辻哲郎, milieu 環境, business management 事業経営

はじめに

今日、社会が大きく変化しつつあるということは広く認識されていても、それをどのようなものとして捉えるのか、どのように対処すべきと判断するのかが、この変化のどの局面に関り、またどの視点から見ることによってかなり違ったものになっている。もはや人は社会の多くの面に関するようには生きていず、あるいはいくつかの局面を、自分にとってのほぼすべての世界として生きているからである。

大学という事業組織も例外ではなく、事業の成立基盤である社会の変化に応じて、目的やかたちを変化させるのであるが、それは学問探究という次の次元と必ずしも無関係にというわけではない。探求者である人は、その同時代人でもあるからである。探求者が生きる社会のありようが、探求する対象のリアリティの形成に関わらないはずはなく、大きく変化しつつある社会にあってはいつそのことである。

必然的に、この変化の本質を探求することと、社会が直面するあたらしい枠組みを生きる人たちへの知的支援を行うことを使命とする大学の研究と教育のあり

方が構想される。社会の変化の、本質面と実際面の要請に応えるという社会的役割が大学にはあるからである。

本稿では、風土学という研究の射程を軸に、研究領域のとらえ方、社会との関わり、高等教育における目標とかたちについて検討する。

基盤としての風土学

風土学 *mésologie* は、フランス人の地理学者オギュスタン・ベルク Augustin Berque¹ によって提唱² されて以降、様々な領域において影響を及ぼし続けている。

ベルクは、“風土” という言葉自体がどのような意味を持つものかということからはじめて、新たな人間存在の存在論を構想するとともに、その研究領域を文芸・文化の比較研究および都市景観や環境倫理などの実践的課題へと展開してきた。ここではその全体の枠組みを概括するために、まず言葉の意味内容から整理したい。

ベルクの“風土”への着目は和辻哲郎の『風土』³に由来する。和辻は、ベルリンにおいてほぼ出版と

同時に読んだハイデッガーの『存在と時間』*Sein und Zeit* (1927) に対する批判を、“風土”の独自の解釈を通じて提起した。そしてベルクは、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブランシュの『人文地理学原理』(1922)⁴をはじめとするフランスの人文地理学における“環境 milieu”の概念⁵の捉え方の流れのもとで、和辻の“風土”（および風土性）の概念の再解釈に取り組んだのである。それは一言でいえば、人間主体と環境との相互関係性を明らかにする取り組みである。そのことについていくらか詳しくみるためには、ベルクが和辻をどのように読み解釈したかということからはじめる必要がある。

まず混乱を避けるために、今日の日本語の風土という言葉の使い方に決定論的な（一方が他方を決定付ける）ニュアンスが含まれていることを確認しておきたい。つまり、ある土地に住む人々は、その土地の気候や地形などの自然条件によって特有の生活や思考の様式を身につけるようになる、という考えである。この気候や地形などの自然環境と住人との関係を、集団の一員としての人のありように援用して、精神風土や政治風土、また今日では企業風土という言葉の使い方も一般的である。ある企業の会社員になると、いつのまにかその企業特有のものの考え方や行動様式を身につけるといことである。成功している企業の経営では、この企業風土をいかに維持してゆくかということが、文化的遺伝子（ミーム meme）の言葉とともに論じられることも少なくない。

和辻の著書においても、自身のヨーロッパへの長い航海の途上で体験した各地の自然条件の変化に基づいて、砂漠、牧場、モンスーンという類型的な文化論を展開していて、その部分では彼自身が地理的な環境決定論の立場に立つように見せている。

しかし、風土という言葉自体、その本来の中国起源の意味である“風土”において、生命の繁殖の場（土）と生命を生み出す力（風）との複合概念であった。風は、古い字形（ト文）では鳳形の鳥の形であり、風神（雄の鳳凰、天の使者）を表している⁶。つまり、万物をかたちづくり生命を与えるものとしての“氣”（生命の息吹）の思想につながっている。この自然環境と人間存在を区別しない宇宙観がこの言葉には内在していて、そのことが自と、自然環境にとどまらず、精神、政治、企業などの、人間の内面から社会制度、社会組

織に至るまでに広がる、この言葉の領域を限定しない用法と一般の人々の自然な理解につながっているものと考えられる。

そして、ハイデッガー存在論批判に立脚する和辻の風土には、自然環境と人間生活をともに対象化して捉えるのではない、つまり、主体としての人間を環境から切り離さない立場が明白に示されているのである。

この書の目ざすところは人間存在の構造契機としての風土性を明らかにすることである。だからここでは自然環境がいかに人間生活を規定するかということが問題なのではない。通例自然環境と考えられているものは、人間の風土性を具体的地盤として、そこから対象的に解放され来たったものである。かかるものと人間生活との関係を考えるという時には、人間生活そのものもすでに対象化せられている。従ってそれは対象と対象との間の関係を考察する立場であって、主体的な人間存在にかかわる立場ではない。

『風土』、p3

その意味で、「自然環境がいかに人間生活を規定するか」という環境論的な地理学に對置されるヴィダル・ドゥ・ラ・ブランシュらの人文地理学に対して、後に和辻も後書き⁷に共感を記しているのである。

ベルクもここから、和辻の“風土”を climate や Klima と訳す同書の英訳や独訳に反論し、フランス人文地理学の流れの上での milieu（環境）さらには milieu humain（人間環境）を風土の訳語に当てようとする。そしてさらにベルクは、先の引用の最初の行にある「人間存在の構造契機としての風土性」について深く考察を進める。

もちろん“人間存在の構造契機”という言い方は、和辻の思想の哲学的なコンテキストからみても、現象学が与えている語の意味で使用されているものと考えられるが、ベルクが特に注目しているのは“風土性”である。和辻はハイデッガーの現存在 Dasein と歴史性 Geschichtlichkeit の関係（時間的）に対して、その空間的対応を風土性として提示しているのである。そしてベルクが向ったのは、この語の持つ意味を担う語をヨーロッパ語に探すことの難しさである。『風土』の翻訳者たちが“風土”と“風土性”（風土を風土たらしめている本質）を訳し分けることに失敗したことを踏まえて、ベルクは milieu のラテン語語根 med を

もとにした新語 *médiance* を風土性の訳語とする。そして *med* の同族語であるギリシア語の *meso* をもとに風土学 *mésologie* を提起したのである。

この *mésologie* 自体は新語ではなく、ルイ＝アドルフ・ベルティオンが 1860 年頃に、人間を含む有機体と、社会的なものを含む環境との、関係を研究する学として提示したものである。人間科学と自然科学との間にまたがるこの学の構想は、当時としては複雑すぎたものか潰えてしまう。そして自然科学における関係の学としては生態学が、その跡を担っている。この使われなくなった語 *mésologie* を、ベルクは風土学の訳語として採用したのである⁸。

このようにしてみた和辻一ベルクの風土性とは、人間存在をダイナミズム（構造的契機）として捉えようとするものであって、主体の絶対化も客体の絶対化をも、ともに拒否するものである。前者は純粹な抽象世界を、後者は純粹な物質世界を思考の前提とし、しばしばその結論を前提世界へと還元する。そのどちらでもない人間の世界の現実を問う立場は、もちろん現象学のものと同重なる。ベルクはその構造を、ハイデッガーが参照したユクスキュル⁹の用語、*Umgebung* と *Umwelt* との関係からはじめて、段階的に説明する。

1. *Umgebung* とは自然科学が対象として仮定している外界としての世界（＝環境）である。
2. *Umwelt* とは、生物それぞれの種に固有の特性に従って捉えられる世界（＝種ごとに生きられる世界、環世界）である。

つまり個々の生物は、*Umgebung* を種固有の *Umwelt* として生きるのである。

一方、人間にも生物種としての人間固有の *Umwelt* があるが、人間の生存を規定しているのは生物的な身体特性だけではなく、世界にどのように関わり（技術）、世界をどう捉えているか（象徴）、ということが歴史的社会的に形をとった、いわば社会的身体というものの特性との組み合わせからなるものである。ベルクはここで、ルロワ＝グーラン¹⁰をひきながら、人間の種としての誕生を、3つのプロセス（①ヒト化＝身体的変化、②人工化＝技術による物の客観的变化、③人間化＝象徴による物の主観的变化）が切り離せない単一のものとして発生したことによって説明する。

ルロワ＝グーランは、技術体系と象徴体系を、動物

的身体の機能の外部化として捉える。機能が外部化するとは、もともと動物的身体ではないものが人間存在の一部となることである。つまり道具や制度、文化が、人間という種の存在構造に組み込まれることを意味するのである。このような存在構造として捉えられる人間像は、多層の関係であり、個として確立された人間存在像とは対照的なものとなる。

そこで次のようになる。

3. Milieu とは、生態学的かつ技術的かつ象徴的な世界（＝風土）である。

つまり人間は、*Umgebung* を *Umwelt*（生物種としての現実）かつ歴史・文化的な現実として、つまり *Milieu* として生きるのである。

ベルクはこの関係を、西田幾多郎が場所／述語の論理として展開した世界の述語的理解の構図を使って次のように図式化する。

(S / P) / P'

(*Umgebung* を *Umwelt* として) を *Milieu* として

ここで S は主体 (Subject)、P は述語 (Predicate) であり、S / P はそれらの関係である。このベルク流の説明図式について理解するためには、印欧語と日本語における形容詞の働きの違いから考えるのがよいだろう。形容詞は、英語では *adjective*¹¹ というように、もの (substantive、名詞、実質的な、現実の、存在を示すもの) に対して付加的な性質、つまり属性を表している。一方日本語の形容詞は、多くの場合西洋の文法を基にした理解に沿って同じく属性と理解されがちであるが、そうではなくて、話者（対象を認知した者）における対象への反応（認知の内容）であるところに特徴がある。あの花は赤い、きれいだ、などと言うときの“赤い”や“きれい”は、あの花の属性ではなくて、それを語る“私”の想いであり捉え方を表明しているということである。

この形容詞の働きの対照的な関係と同じ構造を、世界の捉え方の対比に捉えるのが主語の論理と述語の論理の対照である。

印欧語の主語・述語の区別は、アリストテレスにさかのぼり、形式論理学における命題“A は B である”の A と B がそれぞれギリシア語で *hypokeimenon* と *kategoroumenon* と表現されたことによる。これらに対

応するラテン語が *subjectum* と *praedictum* であり、英語では *subject* と *predicate* となる。

そして文法の歴史の上では、文を構成する成分の中で、主語が他とは別格の明らかなものとして（文の他の部分は述語として）扱われてきたのであるが、それに応じるように、単純化して言えば、思想の上でも、芸術、文化、政治のうえでも、論理学、文法における主語にあたるもの（主語となるもの＝実質、存在）が、探求の中心であり続けてきたという面がある。

一方日本語では、主語は文の成分として、それほど明確に区別される特徴を備えていない。むしろ述語が文の構造を作り出し、主語はその述語が作り出す構造にかかわる要素のひとつとして働くように考えられる。つまりそれが何であるか、ということよりもそれがどう捉えられるか（私にとって、どのように現れるのか／どういう意味があるか）ということをも文は表現することとなる。

つまり、文というものは、主語となるものを主としてその属性や活動を表現するもの、ではなくて、（私にとっての）事態において関係しているものがどうあるのかということをも表現しているもの、であるということだ。

ものそのものの自体としての性質や在りようを記述しようとするところから生まれる世界観（物質存在の世界）と、認識する者の在りよう（場所）におけるものの姿や意味を記述しようとするところから生まれる世界観（感性への現れの世界）との対比が、ここでは S および P として表現されている。

さらにベルクは、この主語・述語の対照関係との別の対応関係を、空間と場所の対照関係としても説明している。先の論理学とも関係してアリストテレスには、トポス *topos* という空間の概念がある。これは古典物理解学的な空間の概念に相当するもので、もの（主体）の同一性の基盤となる均質空間である。ベルクはそれと対照するものとしてプラトンのコーラ *chora*（および西田の“場所”）をあげる。それは人間にとって意識されるものが現れる（生まれる）場所、つまり関係の場である。

このように、S と P とは、知性によって捉えられるものそのものと知覚によって捉えられるもの、主語と述語、空間 *topos* 性と場所 *chora* 性といった対比関係にあるものであり、そして、われわれにとっての現実

の世界は、これら S と P との相互関係として捉えられるのである。

もう一度先の図式に戻ろう。

(S / P) / P'

これはわれわれにとっての現実の世界の構造であり、人間存在の構造である。

ここで P が 2 つあるのは、それぞれが、生物としての（ユクスキュル）、および人間としての（ルロワ＝グーラン）、在りようにおける二段階の世界に対応しているからだ。人間は、物理的世界（S、Umgebung、環境）と生物種としての人間に特有の世界（P、Umwelt、環世界）、そして技術と象徴によって捉えられる世界（P'、歴史・文化的世界）との、相互関係としての世界（Milieu、風土）を現実として生きているのである。

ベルクは、この“として”という構造によって、我々は人間となり、また人間であると語る。純粋な物の世界も、また純粋な美の世界も、風土性の観点からすれば人間のものではなく、愛着を持たれるような物、つまり人間性を与えられた物の世界が人間の世界であるというのだ。

ベルクの風土学の成り立ちを以上のように簡略に概括してきたのだが、ここで問題を逆にみれば、ベルクの批判する現代社会の問題は、この S / P である人間の現実が、S と P とのそれぞれ独自の体系として解体されたことにある。

次にこのことを、現代社会におけるエコロジー運動の問題とあわせて検討する。

近代性批判と環境問題

現代社会の課題は領域もスケールも多種多様であり、関わる主体によって問題は全く異なるものといえるのであるが、大きく捉えてみればそれは、人類史的にみてあるひとつの枠組み＝構造の限界が到来したものとみられている。それが近代性批判である。

近代とは、歴史の上でみれば、地域的にもまた文化領域の上でも、同じ時期に重なるわけではなく、その展開の仕方も異なっている。例えば、芸術、思想、科学、技術、社会制度、政治体制、生産技術と産業などの領域では、はじまりと展開の速度、スケールは各々に関

係し合いながらも異なるものである。しかしそこには、近代を近代たらしめている共通の特徴＝傾向というものをみることができる。それが近代性 modernity である。

近代はむろんのこと、西洋の歴史的な展開に属することであるが、以上の意味で近代性は、今日の全世界的な人間の問題である。

ルネッサンスをはじめとみるような西洋近代の展開は、芸術の革新、科学の発達、技術と産業の発展、あるいは人権思想の成立と民主主義の展開など、ひとつの文明の歴史の問題ではなく、今日の世界における人間と社会の在りように関する。近代とは人類にとってのひとつの巨大事業であるだけでなく、不可逆の変化をもたらしているようにみえる。しかしその一方で、その事業の基本理念そのものに、事業自体の成果を狂わせてゆく構造的な欠陥を内包しているのではないか、ということが近代性批判の要点である。

一般に近代性批判は、主体と客体の二元論に対する批判を核として、科学という知の様式が事物から意味を奪い、生命と人間を物と同じにみなすことを批判する。

ベルクもそれらを踏まえながら、S/P の図式を元に近代性の問題を、人間主体の解釈（主観）から自由な S、つまりそれ自体として存在する普遍的な物の体系と、現象世界から独立に自身を確立できる P、つまり個別の主体としての人間存在の意味の体系との、それぞれの逆説的な共存状態としてみてとる。この解体された S/P（現実）、つまり S および P の独立した双方から、直面する具体的現実を判断せざるをえないという状況に我々が立たされているとみたときに、現代の問題の本質構造が理解される。それは、いかに判断し行動すべきか、という倫理の問題の立脚点をもはやもってはいないことである。

S および P のそれぞれの立場から導かれた、それぞれに矛盾のない分析と判断が、現実の社会における具体的な政策としては、とても受け入れがたく納得のできないものとなるということを、我々はしばしば経験している。我々はそれを、今日の社会が多元化し、価値観や判断基準が相対化しているためのことだとして、受け入れざるを得ない政策的状況とみなしがちであるが、ベルクはそこに多元化や相対化ではなく体系の分離という問題の本質構造と、而して解決の方向を

提示しているのである。

このような状況を特に明らかにしていると考えられるものが、現代社会が迎えている基本課題である環境問題である。砂漠化や地球温暖化として知られる環境問題は、その量的事実とメカニズムを知るうえで自然科学的な対象である。そしてその全体像を把握するためには、従来の個別科学的知識の総体としてではなく、全体をシステムとみなす総合的な科学の様式として生態学の分野を必要とした。その意味で生態学は、物の体系（S）のなかでの新たな総合的体系である。つまり生態学は、人間の主体的価値判断の体系（P）とは関係のないものなのだが、その一方今日の社会では、生態学が価値判断の基準として働く局面がみられるだけでなく、さらに一定の価値体系を築きつつあるようでもある。

そこには二つの面があるだろう。S および P として独立しているとはいっても、人間は S を P とする構造を本質とするので、独立して働いている S のシステムに対して S の一部を P とすることによって対抗しがちであるということと、同じように P を S と取り違えがちでもあるという面である。

例えば今日の我々の用語において、自然は環境とほぼ同義である。人工と自然のように、人為が関与していない物が自然であり、それは自然科学の対象が S（＝外界）としての環境であることに相当している。しかし様々な文化と歴史のうえでは、“自然”という言葉が何を担っているのかということは多様であり相互の互換性は高くはない。それは文芸の対象としての自然の捉え方や、社会の価値観としての表象の体系における位置づけの違いに明らかに見てとられることである。つまり自然は人間によって眺められた光景であり、S/P（何かとして捉えられた環境）である。

東洋では自然が人為と明確に区別される物として取り扱われることは少なく、特に文芸の世界では人の営為の最高水準のものが自然と一致するように考えられる傾向がある。また、自然を生命の原理と見立ててそのなかに人間も含み込む宇宙観は、東洋だけでなく古代ギリシアのもの（生ける自然）でもあり、西欧近代のロマン主義にもその復興がみられる。

自然を人間の内側にもみることが、自分自身によって来たるところとしての過去、太古や母型への回帰にアイデンティティの回復を求める考え方にもつなが

る。それは、ロマン主義が政治的には民族主義や共同体意識の再生につながったことにもみられる。

そして今日の生態学を基盤とするエコロジー運動が、分裂の克服というテーマを諸科学の領域間の問題だけでなく、人間と自然との関係や人と技術との関係、あるいは反戦運動、南北間の不公正問題、地方分権と政治への直接参加、そして地域社会の再生問題まで、領域、スケールともに幅広く展開していることを、その結果としての現れとみることができるだろう。

エコロジー運動

このような科学的知識を核にしたがらの反近代運動ともいえるありかたは、具体的な実態のうえで、一貫性がなく矛盾と錯誤に満ちたものように見える面も少なくない。それは、環境に属するものと文化に属するものとを混同するがゆえのことかもしれない。しかしここに、ベルクのいう S / P の人間の風土を取り戻そうという希求を、つまりコスモス（秩序、宇宙観）の再構築を試みようとする力をみるのであれば、まさにそこから具体的な手立ての可能性を構想することができるのではないだろうか。

ここでは、必ずしも科学的データや知見を根拠とするものでもなく、また自然環境問題の枠組みにも収められないエコロジー運動の実態を、非科学的な大衆感覚の現れあるいは反体制的な政治活動のようにみるのではなく、そこに、科学主義、技術主義、市場主義などの、近代の原理の社会的現れが欠陥を露呈していることへの、改革の希求の傾向の現われとみることにしたい。

その場合に、たとえばエコロジー運動を、環境に対する人間の責任 *responsibility* を果たそうとする活動とみた場合でも、現実社会ではそれは政治にも企業活動にも混乱をもたらしがちであることは変わらない。しかしベルクの風土学の知見は、そこに秩序を再生し探求すべき解決への道をみいだす手がかりを提供しえるように考えられる。まず第一にそれは、主体性の場所の尺度という存在論的な構造を明らかにして、責任についての論議の基盤を定めることである¹²。

風土学が明らかにする人間存在の構造（S / P の構造）は、人間主体と環境との間の相互関係の構造である。そのことが意味するのは、人間の主体性が、さまざまなレベル/スケールでの現れ方をすることだ。た

とえば、すべてが自分の意思と観念によってなる個人存在のレベルから、ある社会の集団的存在のレベル、また人類という種としてのレベルまで、われわれはさまざまなレベルに自身を位置づけることができる。そしてそれぞれの主体の存するレベルによって、担うべきと感じられる責任は、最大（すべて）から最小（ゼロ）にまで変化するのである。

風土学から明らかなことは、いかに行動すべきか、という倫理の問題は、まずこの人間の主体性が現れる場所の尺度の構造に基づかななくてはならないということである。

スケールで並べてみれば、個人、社会、人類、生物圏、地球、太陽系、銀河系、宇宙となるように、人間存在の場所は多様なレベルを持っている。人間の主体性はそれぞれの尺度に応じて現れる。個人という場所において明確な“私”という主体性のものから、ある組織のなかの一員としての限定された責任、また生体としての生を維持する自己防御の発現や、そして宇宙の秩序まで。

このような尺度の混同・混乱が、国家のレベルでも再三現れたことは歴史に明らかである。そして同様に、エコロジー運動が実際何を目的とし何を行い誰のものであるかということについて、全体としては支離滅裂に見えがちなことの原因でもあろう。特に、市民と企業、市民と政府、市民と科学者との対立構造は、互いの存在を、理解しあえないほどに愚かであるとみなしあうものとなりがちである。企業、政府、科学者は、従来からの権威の代表者であり、またその権威の根拠が有効性をまったく失ったわけでもない。しかし“市民”と呼ばれるある人々が、何かが違うと感じるその認識にも、根拠があるのである。それらの根拠の違いが尺度の違いに由来するとき、対話の基盤そのものが築けないままとなることがある。なぜこんなに簡単なことが理解できないのか、と言い合い、相手をその存在から否定しがちになることである。

このような社会現象を、利害関係が異なる特定の参加者による特殊な活動の数々とみるのではなくて、人間の行為と環境との関係を根本から考え直すという“つながり”の構築に結びつけるためには、この尺度の構造をはじめ、風土学的な構造の認識を広く基盤とすることが必要である。

以下では、そのような意図からの、大学の教育のあ

り方について検討したい。

風土学と大学教育

ベルク氏の国際的な活躍と評価のうえでも、また国内の数多くの研究者による関心のうえでも、風土学は学術研究のうえで一定の基盤を築きつつある。しかしここでは、学術の先端領域の問題としてではなく、社会の一般的な要請のうえでの大学教育のあり方における風土学の位置づけと可能性について検討してみたい。

その理由は、国内では大学教育が大衆化し、研究者向けの教育ではなく一般人向けの教育が主となってきたからということではない。むしろ、現実の社会を担うアクターとしてのさまざまな集団が、枠組みの変化の中に混乱しながら、進むべき方向とそれを担う人々を必要としているからである。芸術や思想、政治の最先端にあるべきと考えられてきたものも、市民の問題とされるべき時代なのである。社会の主要なアクターが企業であり、市民の大半が会社員であることをモデルとする社会において、風土学の射程を一般的な社会の要請に重ね合わせて考えた、新しい担い手づくりのための教育プログラムを構想する必要があるものと考えられる。

人間の主体性の場所としての企業

前述の環境問題とエコロジー運動の関係に見たように、今日の環境問題は、地球規模の自然科学的状況だけでなく、近代社会に対する枠組みの変更、そして必然的に人の生活や社会の営みの再構築の問題を迫っている。現実的な人の生き方や社会のありようの面から見ても、この問題の中心にあるのは産業社会の担い手である企業である。企業そのもののあり方とともに、従事する人間に求められるべきことが問い直されている。

たとえば、エコロジー運動の敵対者はおそらく企業あるいは企業と結託した政府である。しかし、都市や産業、市場、科学技術は、すべて実際に人にとって必要な面を持っている。少なくとも全く否定することは考えられない。それは、主体の概念が近代のものであるとしても、人権や民主主義を否定することはできないのと同じである。

あれかこれかの対立構造で捉えるのではなくて、企

業自体が我々の現実 = S/P であり、企業の社会的責任課題 (CSR, Corporate Social Responsibility) の意識の広まりにみられるように、経営側からみた企業のかたちそのものが変化しつつあることを考えるべきではないだろうか。ここでは先の尺度の問題としてみた人間の主体性の場所のひとつとして、企業という集団・社会システムを考えてみたい。

しかしもちろんそこに、本来倫理とは無関係の環境の領域に環境倫理という言葉当てはめてみるのと同じく、企業倫理という問題を設定してみても存在論的な取り違えになるだけだということも正しいだろう。しかし環境倫理という言葉を使う人の意図がその言葉どおりではなくて、切り離された環境に人間主体をつなぎ直そうというものである限りにおいて、言葉の誤用はともかく、企業倫理も企業という枠組みを人間や社会、文化、環境との関係から再構築しようという意図において、全く斥けられるべきものでもないだろう。

たしかに近代についてと同じく、企業についても、その活動が極大化した今日、その本質のうちに構造的な欠陥があることも明らかになりつつある。しかし、企業を否定 (絶命) させるのではなくて、その成立 (生存) を可能とするような進化を実現する新しいかたちを求めること、つまりこの枠組みの変化状況の中で、(技術としての) 企業を存続しようとする意欲とその加担者を求めることが当面は現実的である。

このような思考の際にも、現象として主体のように振舞う企業を、アナログカルに人間存在とびったりと重ねて考えてしまうような、素朴な存在論的過誤には注意したい。

企業は本来的に、問題の解決のための、あるいは必要を充足するための、目的志向的な組織・制度である。それゆえこの目的については、それ自体が悪である例外と違法の場合を除いて、倫理的であるかどうかを問うことに意味はない。また自由市場では、同じ目的を志向する組織と制度が複数存在し、互いに競争関係にある。そして競争は、利益を尺度として、拡大と縮小、存続と滅亡を結果としてもたらしている。その活動から得られる利益が大きければ存続と拡大に、小さければ縮小方向、不足であれば滅亡へと結果することになる。この、目的を同じくする競争者の間 (業界) における相対的な利益の大小は、競争関係にある組織・制度の間の合理性・効率性によってもたらされるもので

ある。この効率性の尺度にも倫理は関係がない。一方、この利益が誰のためのものであるか、という点において現代的な特徴がある。企業活動は、その発祥の姿である個人間取引のモデルに長く依拠しすぎてきた。個人と個人の取引であれば、取引が正当なものである限りにおいて、利益は双方のものである。しかし今日の発達した株式会社制度において、所有と経営が制度的に分離し、双方がともに限りなく匿名的な個人の集りによって構成されることになると、利益が誰のものであるのかが不明確になる。われわれになじみのある現代の企業の姿は、(それを批判的にみるところからは)株主と従業員はもとより経営者も含め、誰もが事業活動そのものへの全体的な責任も自由も担うことがなく、唯一明確な評価尺度となる財務会計上の価値＝金銭利益を求め続ける自動機械に、すべての加担者が回収されているというものである。

この金銭価値に一元化されてしまった企業活動に対して、利益の尺度の多様化と主体の多元化によって、構造的に作り変えることを志向する経営の試みがCSRである。

CSRは、社会にとって“善い”企業をつくることが長期的な企業経営に有効であるという考えに基づく。しかしその手法は、企業が得た金銭利益を政府の手(税のメカニズム)を経ず直接に社会還元するフィランソロフィ(philanthropy、慈善事業)とは区別される。CSRとは自社の事業活動の実態をくまなく見て、その活動の遂行と結果とが、“誰にとって”善い／悪いのかを明らかにし公開する経営手法である。

まず企業の事業活動にかかわるさまざまなセクター(事業関係者:株主、従業員、顧客、取引業者、周辺住民、資源・環境共有者等々)を関係構造として明らかにし、それぞれを利益主体として考える。そしてそれぞれの主体にとっては何が利益となるのかということ、利益の尺度となる種類と質(株価、給与、雇用、健康、公正、景観、静穏、安全、資源、自然環境等々)に応じて成果を再評価するのである。つまり事業活動を多元的な主体関係として、またそれぞれの関係をまた、多様な種類・質の利益尺度において捉えるのである。

CSRは、事業目的を善いものにしようということでも、事業成果を善いことに使おうというものでもなく、事業活動の遂行方法についての構造的改革である。前二者は、企業という存在者のレベルでの倫理を問う

ことであり、実質企業はそのようなこと(自由と責任、権利と義務)を問うことのできる存在者ではないため、問題解決にはならない(仮に違法があった場合でさえ、責任者の罪科が問われるだけで本質的な問題はむしろ隠される)。

CSRは、利益の主体を構造的に明らかにし、その各主体のレベルにおいての自由と責任を問うことにおいて、倫理を問う具体的な活動の場を作り出すのである。経営のレベルにおいて必要となるのは、この主体とそれぞれの関係領域(環境)との相互関係を取り扱う枠組みと技術である。

今日の企業戦略の上で、事業の成立構造そのものを策定する事業活動(マーケティング¹³⁾)の内容が大きく変化しつつあり、その意味でCSRのような領域への関心と実践の広まりは、企業の在りかたについてのいわば存在論的な問い直しの必要を明らかにしているといえるだろう。

このような時代状況において、企業に代表されるさまざまな事業組織において求められる人の能力も変化している。従来型の、特定の専門領域に適応した専門家的能力ではなく、さまざまに変化する状況に対処できる能力である。そこには、固定・安定を常態として変化を捉えるのではなくて、相互関係の状況を現実とみる認識を基盤として、関係的に生まれる人々の価値観を捉える能力が必要とされる。つまり、S/Pを把握しそして関わる能力である。

このような社会から今日、大学という実践に求められているのは、集団のスケールでの主体性の場所についての研究と教育であるように思われる。次にその具体的なかたちを教育プログラムの構想として検討したい。

三つの総合教育構想

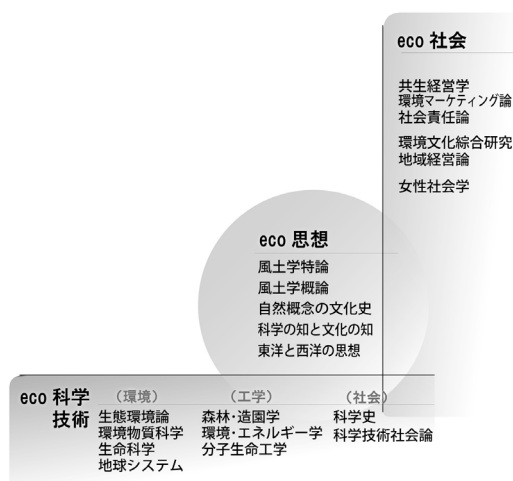
認識論的な意味での存在論と地理学の接近を、和辻は哲学から地理学に近づくことで、ベルク自身は地理学から哲学に近づくことでなしてきたと、ベルクは述べている¹⁴。風土の学のうちで、存在の普遍性と空間的な表現の個別的なあり方との、総合の道筋のことである。

それをヒントにしながら、ここでは2つの軸を設定することを考えてみたい。それは科学・技術の軸と、社会の軸である。実際の研究・教育の場面では、理念

的にすれ違う傾向（互いの射影がゼロ）がしばしば見られるものである。

現実の社会に 대응しようとするのと、科学的な知識と技術によって成し遂げられることを調和させることは、まさしく近代の企てであるが、それが破綻に近い結果（環境、経済、紛争等々）をもたらしてきたことは、単純化すれば、この両者を一元的に捉えるという欠陥によるものと考えられる。

ここでは、これらを本来の異なる場所におき、双方の調和の原理としての風土学を間に位置づけることによって、この3つの領域による総合的な教育プログラムを構想したい。



これは“エコ eco-”の問題を考える教育プログラムである。ここでエコは、環境科学の領域を意味するだけでなく、われわれの社会がどうあるべきであるかを実践的に考えることを意味している。そこで科学・技術と社会の二つの軸を持つのである。

「科学・技術」では、「環境」、「工学」、「社会」の3つのサブカテゴリをおく。「環境」は、生態学を中心に、地球、生命、物質など、自然科学的な環境観の形成のための基礎科目群である。それらに対応する応用領域の技術の適用範囲と可能性を認識するためのものが、「工学」である。そして「社会」は、これら科学と技術が社会をどのように変えてきたのかを、社会システムの上で、また認識の上で、歴史的（科学史）および共時的（科学技術社会論）に検討するものである。つまりこの領域は全体として、科学・技術を軸として現代社会を通観することを目的としている。

「社会」は、現代社会の問題や徴候を通じて、あるべき社会の姿を制度・組織・経営などの面から実践的に探求する領域である。共生、地域、女性など、従来の社会モデルに対抗する概念からどのような組織形態や制度が導出されるか、またそれらに対応する経営技術の構想などをすでにある現実とともに実践的に検討するものである。

現実の社会問題は、この二つの領域を組み合わせることによって具体的な姿をとると考えられるが、重要なことは、これら両者を通じて、個々の問題領域のスケールと次元が多様であることである。恣意的な組み合わせは問題の解決ではなく混乱をもたらすことになってしまうだろう。

「思想」とした風土学の学習領域が、この全体的な教育の枠組みと視座を与えるものである。ここではベルクの風土学の存在論的な性格だけではなく、メディア学の持つ情報の構造論（記号論、技術社会論）を相互関係的に学ぶことが想定される。

ベルク自身も、風土学 *mésologie* とレジス・ドゥブレのメディア学 *mediologie* に多くの共通した特徴をみている¹⁵。ドゥブレはメディア学の提唱者¹⁶であるが、伝達することの考察において、記号論的な面とともに、組織化された物質（物と技術の総体）の面を相互関係的に捉えている。これはベルクの存在論と空間（環境、地理学）の関係に相当する。情報の伝達が実際になるためには、技術的、社会的、制度的なものが必要だと説くドゥブレの“メディア”への学的志向は、ほぼベルクの“風土 *milieu*”へのそれと同じである。

実際のところ、インターネットに代表される情報技術の社会的発展は、現代社会の政治的・組織的な近代性に対抗するものとして生まれ発展してきた面を持つ。ドゥブレのメディアはコンピュータ情報技術の領域に限られるものではないが、この技術の社会的コンテキストやその背景にある関係型のモデル認識が技術、制度、組織、人間の領域にまたがるところから、メディア学の今日的な実践領域として、情報技術・情報化社会の問題が浮かび上がるのである。

一方、風土学・メディア学の考え方を学ぶためには、広い意味での近代性批判としてのポストモダンの思想について、ある程度の基礎的な理解が必要である。「東西の思想史」、「比較文化論」、「自然概念史」といったものが想定される。

以上、三つの領域になる教育プログラム像を概括したが、実際の学習は入門段階のものから上級科目へ、段階的に進められることになる。学習計画の上で三領域をバランスよく配置すること、学習者にとって射程を誤らず理解を深めるような時間的展開の設計は、本稿で触れてきたこととは別の課題である。

おわりに

大学教育が大衆化を越えて普及段階へ入った今日、大学教育への社会的要請を基礎学力訓練や特定領域の職業資格教育に捉える例も大変に多くなってきた。しかし一方、現実の社会の状況と企業の実際の人材要請の面から見ると、状況はまったく違ったものになる。

ものごとを構造的に捉え、総合的な知見のもとに判断する能力は、もはや一部のエリートのみが必要ではなく、ほとんどあらゆる企業人・社会人に必要とされているのである。単純で並列的な知識や特定領域に限定的な専門知識・技術によることでは、安心して自分の生活や人生を営むことが困難な、すでに高度に複雑化した社会の現実がある。

この現実を前にすれば、新しい社会の構造をまず認識し、人生において継続的に学習を進める方法を身につけるといふ学習の必要は自明のことである。

現代社会の問題をどう捉えるか（総合的枠組みの認識）、解決のための課題領域をどこに設定するか（科学的・技術的な知識）、そのためにどうするか（社会的・組織的・制度的な構想力）ということテーマに学ぶことである。

近代と企業というシステムは、人が自立した生活と人生を送ることができるというモデルを標準化し、くまなく普及させることに成功した。しかしそれが一定の成功をおさめたかにみえたそのときから、逆にそれが人の自立と自由とを本質において奪うものであることもまた明らかになってきたのである。地球レベルから個人の生活行動のレベルまで、危機意識をわれわれに突きつける環境問題、あるいは広くエコの問題設定は、基本的にこの近代と企業のシステムについての見直しを人と社会にせまるものである。

風土学は、人間性について問うもの（＝存在論）であり、人間とはどのような存在であるとみなしているのかを、環境と生物性（＝生物身体）および歴史と文化性（＝社会身体）との人間主体との相互関係（＝通

態）において明らかにしようとするものである。

それは哲学と文化学の先端的な専門領域として大変に興味深いものであるだけでなく、我々の社会の現実を生きる人々のものであるべきである。大きな枠組みの変化を迎える現代の社会にあって、本質からその問題を捉え具体的に答えることが求められる大学教育の場において、風土学の構想に基づく教育の実現に広く深いリアリティの充実をみることができるとは思えないだろう。

¹ フランス社会科学高等研究院 (EHESS) 日本研究所 (CRJ) 教授 (前所長)。日本では、東京日仏会館学長 (84-88)、国際日本文化研究センター客員外国人研究員 (93-94) 宮城大学客員教授 (99-2000) など歴任。近年では第 20 回福岡アジア文化賞大賞 (2009) をアジア以外の国・地域からの初の受賞。

² Le Sauvage et l'artifice. Les Japonais devant la nature, 1986, 『風土の日本—自然と文化の通観』, 篠田勝英訳, 筑摩書房, 1988 年

³ 『風土 人間学的考察』, 岩波書店, 1935 年

⁴ Paul Vidal de la Blache, 1922, Principes de géographie humaine, ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラージュ, 『人文地理学原理』, 飯塚浩二訳, 岩波文庫, 1940 年 (改訳 1970 年)

⁵ “環境” は、人間や生物を取り巻く外界のことであり、人間や生物の生存と行動に関係するものであるが、一面それは決定論的な影響を与えるものとして捉えられがちである。ヴィダル・ドゥ・ラ・ブランシュらは、人間の環境への働きかけを重視した。

⁶ 「風は風神として、鳥形の神とされた。風神がその地に風行して風気・風土をなし、人がその気を承けて風俗・気風・風格をなす。さらに風情・風教のように、その語義は幅広いものとなった」『字通』, 白川静, 平凡社, 1996 年

⁷ 『風土』の後書き, p.287, 1948 年

⁸ ベルク自身はその後、風土学 *mésologie* の復興や確立といったことにはとらわれていず、また和辻の風土に示唆を受けた *milieu* とともに *écoumène* (地球上で人間が住むところ、居住圏、現実) という語を使用している。人間の (住む) 風土 *milieu* に対して、人間の風土が成り立つ関係としての風土 *écoumène* という対比である。そしてこの存在論的な関係である *écoumène* の分析の理論は、彼の思索の源泉となった日本文化の研究などの地域的・個別文化的な領域にとどまらず、世界についての一般的な問いを提起するものである。Écoumène. Introduction à l'étude des milieux humains, Paris, Belin, 2001, 『風土学序説—文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に』, 中山元訳, 筑摩書房, 2002 年, p.190

⁹ Jakob von Uexkull, Georg Kriszat, 1934, Streifzuge Durch

die Umwelten von Tieren und Menschen Bedeutungslehre, ヤーコブ・フォン・ユクスキュル, ゲオルク・クリサート, 『生物から見た世界』, 日高敏隆, 野田保之訳, 思索社, 1973 年, 岩波文庫, 2005 年

¹⁰ Andre Leroi-Gourhan, 1964, *Le Geste et le Parole*, アンドレ・ルロワ=グーラン, 『身ぶりと言葉』, 荒木亨訳, 新潮社, 1973 年

¹¹ 後期ラテン語 *ad(j) icere* (つける、加える) の過去分詞 *adjectus* より派生した中期英語

¹² 『地球と存在の哲学』, 篠田勝英訳, ちくま新書, 1996 年, pp.150-154

¹³ *marketing research* と市場調査 *market research* や市場実査 *market survey*、市場分析 *market analysis* が混同されることが少なくないように、マーケティングは販売活動と同一視されがちである。しかしマーケティングは本来、企業の事業活動の構造そのものを考えることである。従来「売れる仕組みづくりの研究」とされてきた領域は、今日、企業の社会的現実の複雑化とともに、本質的な問いを前にしている。

¹⁴ 『風土学序説』, pp.4-5

¹⁵ 『風土学序説』, pp.190-194

¹⁶ Régis Debray, 1991, *Cours de médiologie générale*, Gallimard, 『一般メディアロジー講義』, 嶋崎正樹訳, 西垣通監修, レジス・ドブレ著作選 (3), NTT 出版, 2001 年, 1994, *Manifeste médiologique*. Gallimard, 『メディアロジー宣言』, 嶋崎正樹訳, 西垣通監修, レジス・ドブレ著作選 (1), NTT 出版, 1999 年, 1997, *Transmettre*, Éditions Odile Jacob, 『メディアロジー入門—「伝達作用」の諸相』, 嶋崎正樹訳, 西垣通監修, レジス・ドブレ著作選 (2), NTT 出版, 2000 年